

海外の話題

中国女子バレーボールの郎平監督

農林中央金庫 北京駐在員事務所所長 森下 純也

先般のリオ・オリンピック終盤、日本のメダル獲得数が史上最多に達したのとちょうど同じ時期、中国で最も話題となったのは女子バレーボールの3大会ぶりの金メダル獲得であった。

中国女子バレーボールチームを率いているのが郎平監督と聞き、自分が中高生の頃を思い出した。1980年代前半、世界最強の中国女子バレーボールを牽引したのが現役時代の郎平氏であり、1981年：ワールドカップ、1982年：世界選手権、1984年：ロサンゼルス・オリンピックの全てで金メダルを獲得し、中国女子バレーボールの黄金期をもたらしたのは、鉄のハンマーと呼ばれた郎平氏の強烈なスパイクであった。バレーボールと言えれば体育の授業でしか経験のない私でも知っているくらい、郎平氏は世界最強の中国女子バレーボールの象徴であった。

郎平氏は指導者としての実績も素晴らしい。アメリカ留学を経て1995年に中国女子代表チーム監督に就任すると、当時低迷していたチームを立て直し、同年ワールドカップ：銅メダル、1996年アトランタ・オリンピック：銀メダル、1998年世界選手権：銀メダルに導いた。中国女子代表チームの監督退任後にはイタリアのプロチーム監督を経てアメリカ女子代表チーム監督に就任し、2008年に母国で開催された北京オリンピックにて銀メダルを獲得している。私が知らなかっただけで、郎平氏は世界女子バレーボール界の中心でこれまで常に活躍してきたのだ。

北京オリンピックでの中国女子バレーボールチームは一次リーグでアメリカに敗れ、最終成績もアメリカを下回る銅メダルに留まった事もあり、今でも「北京での郎平氏の裏切りを忘れない」との声もあるようだが、中国国内の大方の意見は、郎平氏自身は純粹にバレーボール道を極めようとし、その過程でアメリカ女子代表チーム監督という選択肢が魅力的であったというもののようなのだ。

指導者としての郎平氏を紹介した記事によると、2013年に中国女子バレーボール代表監督を再び引き受けた後、「代表監督を引き受ける事を選んだ以上、失敗しても後悔しないように」世界チャンピオンになれるチームを作るために選手の入替えを果敢に進める一方、95年以降を含む90年代生まれの選手が大半を占めるチームにおいて、「選手たちは自分の娘のようなものであるから、私には母親としての責任がある」とコート内では腰の持病を抱えながらも自ら手本を示し、コートを一歩出ると若い選手たちを励まし、自腹を切ってお年玉をあげるなどしていたという。また、若いチームにとって一番怖い事はプレッシャーに負ける事だと考え、負けたストレスは全て自分自身が背負い、若い選手たちは気持ちを楽にしてプレー出来るように最大限の配慮をしていたそうだ。

今のところ郎平氏は今後の去就を明らかにしていない。年間を通じて拘束される代表監督よりも、1年のうち5ヵ月間程度対応すればよいクラブチーム監督となり、家族と過ごす時間を増やす事を望んでいるとの報道もあるが、指導者としての実績を踏まえると、より高い立場から中国ナショナルチーム全体の立て直しを任されるかもしれない。

リオ・オリンピックでの中国のメダル獲得数は世界第三位であり、スポーツ強国である事を十分示したと思えるのだが、前回ロンドン・オリンピックでの獲得メダル数を大幅に下回った事が問題視されている。獲

得メダル数が落ち込んだ要因の一つとしては、オリンピックに初めて出場した若手選手の経験不足も挙げられている。中国全体が豊かになり、オリンピックに参加出来るだけで幸せと感じる選手も現れる中で、ハングリー精神に替わる選手のモチベーションが必要となっているのであろう。

東京オリンピックが開催される2020年は、中国共産党結党100周年にあたるため中国にとって非常に重要な年である。中国スポーツ界が東京オリンピックに向けてどのように巻き返しを図るのか、若手選手を鼓舞激励して金メダルを獲得した手腕が高く評価されている郎平氏の今後と合わせて注目したい。